

C'n

vol.24

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART



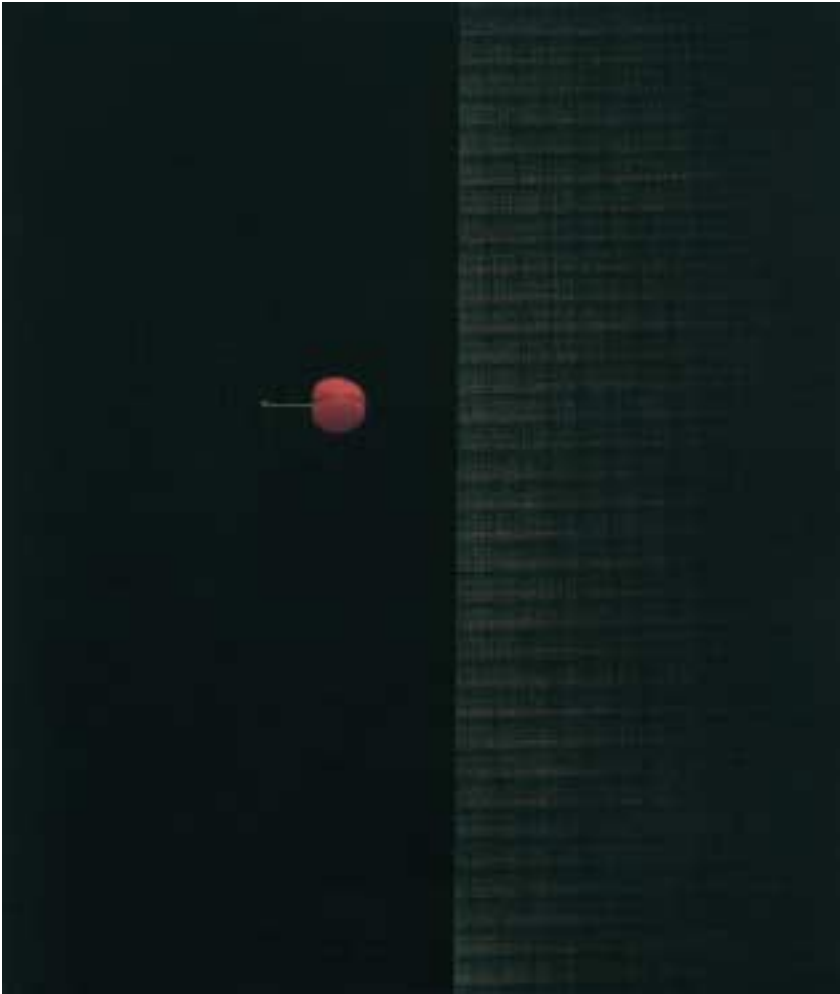
「19と1つのさくらんぼ」1965年

メゾチントという魔法

20世紀版画の巨匠

浜口陽三展

浜口陽三の幽玄



《1つのさくらんぼ》1962年

さわやかな青空の下、学校では運動会の歓声がわき上がり、グラウンドからは草野球のボールの音が聞こえてきます。スポーツの秋たけなわというところですが、美術館にあってはまさにイン・シーズンのこの頃です。

先頃まで行われていた「鈴木春信展」は、満を持しての企画が好評をもって迎えられ、多くの観覧者に浮世絵版画の上質な美しさを楽しんでいただけたようです。国際浮世絵学会との共催で二日間にわたって行ったシンポジウムには、友の会の会員をはじめ一般市民の方々も数十名参加して下さい、最新の学術的な成果にも触れていただける機会となりました。最終日近くになってカタログが売り切れ状態となり、あわてさせられましたが、予約受付による郵便での配送を希望される方も大勢申し出られて、恐縮かつ感激させられたものでした。会場の混雑にもかかわらずさしたる苦情もなく、順序を守って熱心に版画に見入って下さっている様子に、館員ともども私も、あらたな力を与えられました。打てば響く太鼓のように、今後とも良質の企画を用意してご期待にこたえなければと、肝に銘じたものでした。

当館がお贈りする美術の秋の第二弾は、「浜口陽三展」です。鈴木春信は18世紀の木版画家でしたが、浜口陽三は20世紀の銅版画家としてやはり国際的にその名が知られています。とくに

さくらんぼの図は多くの美術愛好家の目に焼きついているはずですが、私にも多感な青春期がありました。私にも多感な青春期がありましたが、そのある日の昼下がり、美術雑誌の口絵に載っていた浜口陽三のさくらんぼの絵に心を奪われ、喫茶店のシートに長い時間すわり込んでいたことを思い出します。黒い幽暗の闇の背地から鮮やかに赤く浮ぶ小さな桜桃の実、それはあたかも能の舞台に登場する花の精にも似て、どこか妖しい美しさを輝かせています。

メゾチントという西洋由来の技法に独自の工夫を加えて作り出した、寡黙で、清らかで、しかも品格の高い浜口陽三の造形世界は、日本の伝統的な美学である幽玄の深みに迫り得たものといって過言ではありません。

この、根を深く自己の内部に下ろして独創の道を切り拓いた版画家が、千葉県ゆかりの人であることは、実にたのもしい限りです。浮世絵の開祖菱川師宣は安房の国の保田の生まれ、現代の国際派浜口陽三は下総の国の銚子の育ち、房総は古今二人の偉大な版画家を出したことを、もっと誇りにして良いだろうと思います。

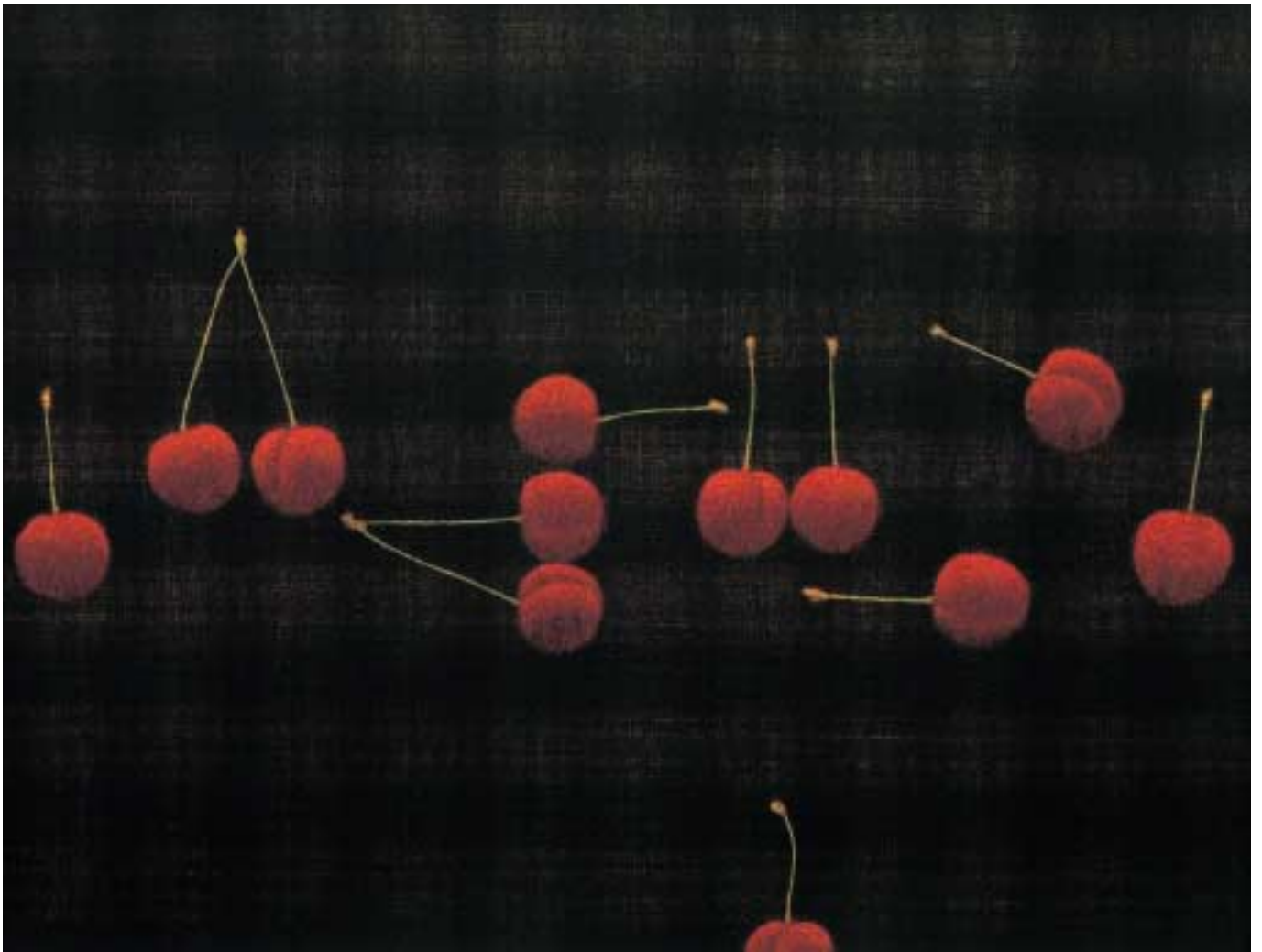
さて、美術館では、特別展に合わせて様々なイベントも企画しています。先の春信展では、現代邦楽界を代表するお一人の栄芝さんとその社中による小唄、端唄のコンサートを開きました。小唄の曲の中には、「笠森おせん」、「柳屋お藤」など、春信の絵のモデルとなった評判娘たちも登場して、のどの名調子と共に気の利いた趣向に喜ばされました。

今回の展覧会では、版画家の生田宏司氏にご指導をお願いして、「体験・メゾチントに挑戦してみよう！」というワークショップを行う予定です。たった3日間で、あなたもメゾチント技法による銅版画作品を仕上げるのが可能とのこと。どうですか、美術の秋にそれらしく、手を動かして、浜口陽三に少しでも近づいてみませんか。

館長 小林 忠

メゾチントという魔法 20世紀版画の巨匠 浜口陽三展

堅く冷たい金属の板から
こんなにも柔らかく
温かなものが生まれる不思議



《17のさくらんぼ》(部分) 1968年

浜口陽三の銅版画をご覧になったことがありますか？ たとえば闇に浮かぶさくらんぼを、たとえばかすかな光を浴びたぶどうたちを。まるで上質の織物のような、あるいはしっとりと水気を含んだ柔らかい苔のような空間に、ひっそりと息づく果実たち。この不思議な画面と向きあえば、人は誰もがまず「ふれてみたい」と思い、やがて「どのような仕組み？」と目を凝らすのではないのでしょうか。

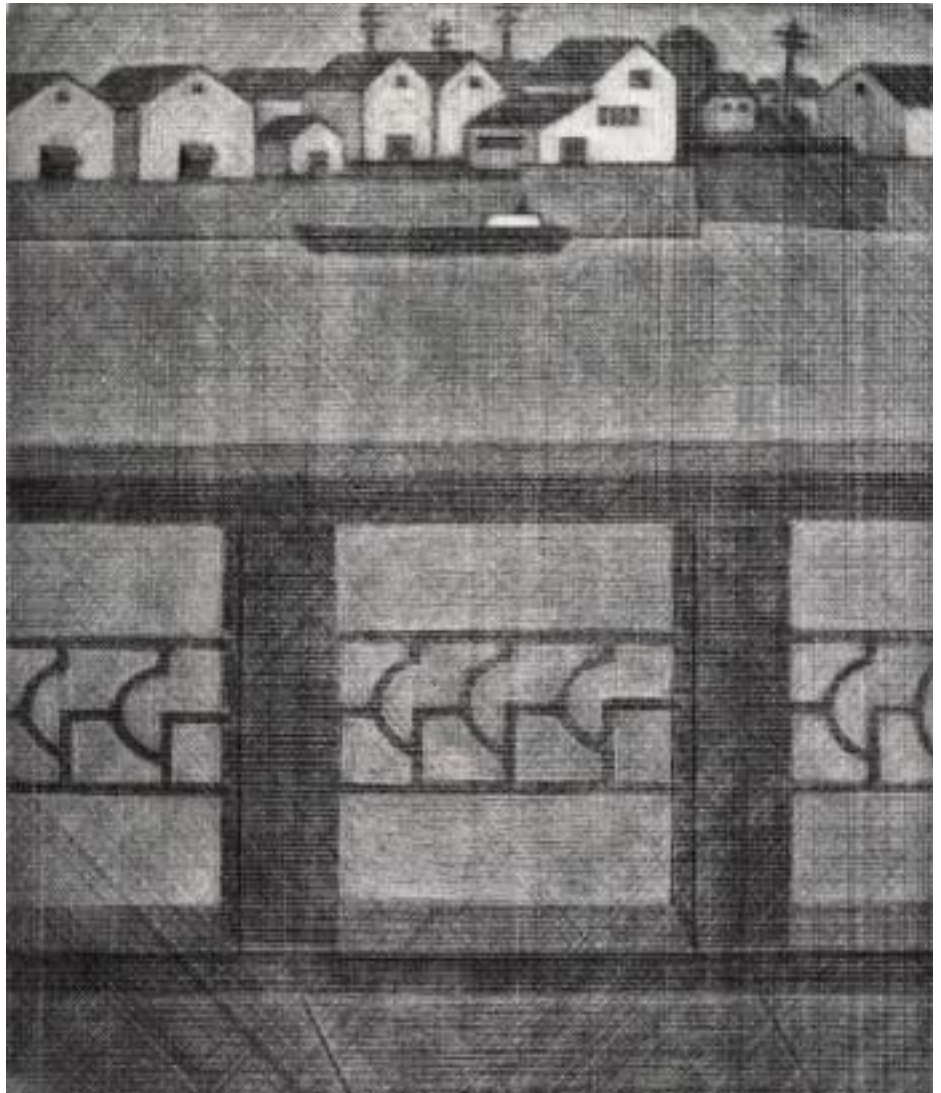
浜口陽三（1909-2000）は和歌山県に生まれ、5歳から12歳までを千葉県銚子に過ごしました。上京して東京美術学校彫刻科に進みますが中退、1930年フランスに渡ります。はじめ油彩を手がけていましたが、生来の気質が浜口を、よりささやかで静かな表現へと向かわせました。そして「運命の」ともいべき銅版画技法、メゾチントに出会います。本格的な着手は40歳頃のことですから、遅咲きの作家といってよいでしょう。

メゾチントは木版や芋版でおなじみの凸版ではなく、凹版による技法です。版の全体にベルソーという道具でびっしりとキ

ズをつけ、微細なささくれが抱きこんだインクを紙に転写させて作画するものです。ささくれをそのままに刷れば漆黒が、完全に取り去れば純白が削りようによって黒から灰、白にいたる無限の階調が紙のうえに現れるわけです。浜口はこの技法を見出し、さらには黒・青・赤・黄の四版を重ねるカラー・メゾチントを開拓した作家です。

メゾチントを始めた頃の浜口について村井正誠は、それらしい表現に近づくために定規を使って線の束を引いたり、点々を刻んだりして苦労していたと語ったそうです。つまり浜口は、17世紀に発明され、19世紀半ばにすたれたこの技法の正しい手順を知らなかったのです。創意と手わざを総動員しながらの長い試行錯誤を経て、ようやく思うとおりの、そして、思う以上の新たな造型を手に入れる喜び。刷り上げて紙をめくるときのときめきと驚き、深い満足とを想像してみたくになります。

意中の形を求めてひとり黙々と版を刻む、こうした職人を思わせる姿勢は、終生変わらなかったようです。ひとつの作品を仕上げるのに数ヶ月もかかるという、気の遠くなるような時の蓄積を繰り返すうちに、黒はいよいよ黒く、色はますます鮮やかになり、闇が深まるにつれて光は輝きを増してゆきました。浜口がこよなく愛したモチーフたち さくらんぼやぶどう、ざくろや



《偶田川(大川中洲附近)》1951年

《黒いさくらんぼ》1963年



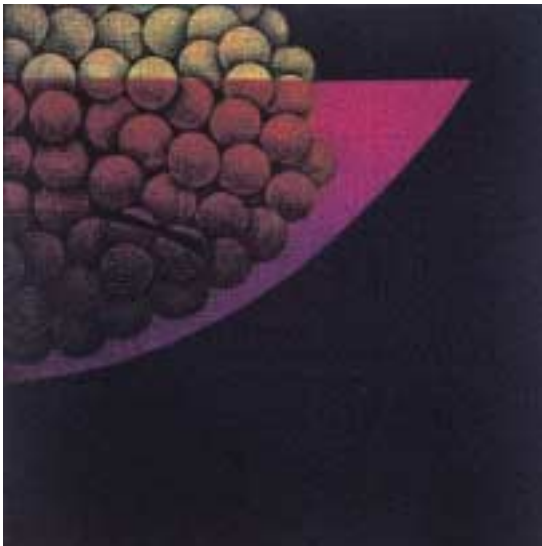
西瓜は慎重に配され、妙なる光に照らされて、ここでしか出会えない、神秘的で特別な存在に高められています。ただしモチーフの選択については、浜口が大の食いしん坊だったことに由来するともいわれているのですが。

銅版画を一度でも試みたことのある方ならご存じだと思いますが、銅の板はとても堅いものです。浜口陽三の作品が見せる画肌がどんなに柔らかそうに見えても、版のささくれのひとつひとつに蓄えられた顔料が紙に食い込んでいる、ただそれだけのことなのです。浜口はメゾチントという技法を選び、それに光を呼び込み、四色を重ねるといった独自の工夫を加え、目に悦ばしく手ざわりのよい(あくまでも想像上ですが)幻の絵画空間を現出させるのです。堅く冷たい金属の板からこんなにも柔らかく温かなものが生まれる不思議 浜口の巧手を魔法と呼びたくはなりませんか? そして当館に足を運んで、その魔法をご自分の目で確かめてみてはいかがでしょうか?

学芸員 西山純子



《西瓜》1981年



《ぶどう》1978年

20世紀版画の巨匠

浜口陽三展

2002(平成14)年11月2日(土) - 12月23日(月・祝)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日

但し11月4日(月・祝)、12月23日(月・祝)は開館 11月5日(火)は閉館

【入館料】 一般800(640)円

大学・高校生560(450)円

中・小学生 240 (200)円

()内は前売・団体30人以上の料金

前売券はJR東日本びゅうプラザで発売

【主催】 千葉市美術館 / 日本経済新聞社

「体験・メゾチントに挑戦してみよう!」

講師：生田宏司(版画家)

11月10・17・24日(日) 9:00-12:00, 13:00-16:00

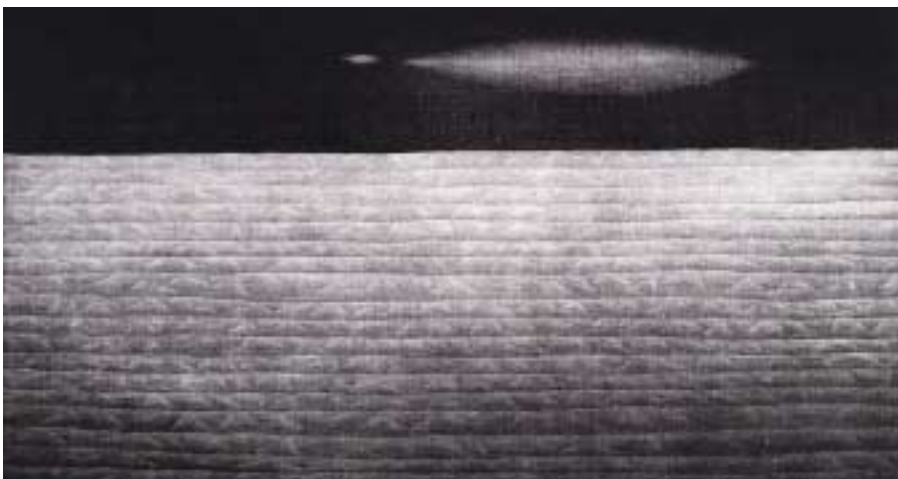
参加受付は好評のうち締め切らせて頂きました。

ギャラリートーク

11月13日(水)、23日(土・祝)、12月4日(水)、14日(土)、23日(土・祝)

いずれも14:00～(約1時間を予定)

8階展示室入口にお集まり下さい。



《雲》1958年

報告 アートプロジェクト検見川送信所 2002



アートプロジェクト検見川送信所2002 オープニングパーティー光景 写真提供：長田謙一

「プロジェクト」と言えば、「展覧会」とは若干異なるスタイルの、何らかのストーリー性をもったイベントを想起します。何の因果かこのところの千葉近辺は、「菜の花里美発見展」といい、この「アートプロジェクト検見川送信所(通称ケミプロ)」といい、美術関係のプロジェクトが多く目立っています。もちろん千葉市美術館としても、その動向に無関心でいられようはずがありません。

この「アートプロジェクト検見川送信所」は千葉市内では目下唯一の、全国から注目されている地域型アートプロジェクトです。それは、このイベントが単なるプロジェクトではなく、学校が授業の一環として、学生主体に開催するアート・プロジェクトだからです。そこには学生の潜在能力の活用と実際のスキルの習得、研究機関の社会化、そして街の活性化への寄与、その一連を通じてアート自体の普遍化、といった多元的な可能性を孕んでいます。3回目を迎えた今年のプロジェクトは間島領一、藤浩志、そして南村千里の3人のアーティストを招聘し、学生たちが検見川町の人々の協力を仰ぎ、それぞれの実働班にわかれて活動しました。

このように、特定の町で展開される、地域型プロジェクトでは、初期の段階ではある程度は必ず住民とのコンフリクトが起こるものようです。しかし、それが実現の段階になると、コ

ンフリクトのなかからコミュニケーションが発生し、熱心な協力者も現れてもきます。また、その過程からストーリーが見えてもきます。

過程の充実度に比すれば、プロジェクトの終了後には、目に見える成果はほとんど残りません。しかし少なくとも参加した数十名の学生達と来訪者、住民の無意識のうちには、アーティストが作品を通じて目論んだ何かの影響が及ぶはずで、その力が、参加したひとりづつを突き動かし、彼らがやがて他の誰かに影響を与えることがあるでしょう。芸術はそれ自体、社会に向けて限りなく無力に思えますが、ひとりひとりの人間に影響を与え、その影響力が社会に蓄積する。その繰り返しこそが芸術になし得る特別のこのように思えます。今年で3回目を迎えたプロジェクトが、参加者を通じて、残しうるものは何でしょう。その活動の推移を、主催者の目から、学生代表に取りまとめてもらいました。

今秋は、取手アートプロジェクト(茨城県取手市)、芝山アート展2002(千葉県山武郡)、墨田区向島地域のアートイベントが開催されています。いずれも何らかのかたちで大学生など若者たちの能力が活用されています。美術館とは違った場にも、芸術との接点は多くなっているようです。(ha)



カフェ 気まぐれハウス 内部

藤浩志 《かえっこショップ》に集う子供たち
写真提供：長田謙一



間島領一 《検見川白書in千葉》



トークセッションでのアーティスト藤浩志(左)、間島領一(右) 於三峯神社

10月12日秋晴の空の下、三峯神社で幕をあげた『アートプロジェクト 検見川送信所2002』。間島領一作詞・学生作曲の『愛しの検見川』のリズムにあわせた、事前WS(ワークショップ)で振りを覚えている子ども達と、ラジオ体操等でおりに触れ彼らの中に入っていった学生を中心としたケミーちゃん体操の輪は、一気に検見川の町と人を包んでいく。それを囲むように置かれたペットボトルに思い思いに席をとった様々な世代の町の人々の見守る中、開会式が進行した。こうして始まったプロジェクトは、翌13日までの二日間にわたって繰り広げられた。

間島領一を中心に千葉県内各首長にアンケートを送付・回収し、パソコンと格闘しながら冊子とインストールにまとめた「検見川白書in千葉」。そこでふるまわれる「検見川焼き」。藤浩志の下で、8月から自転車を列ねて繰り出したチャリカフェ、チャリかえっこ、チャリぬいぐるみシアターが広げた子ども達の輪で賑わう、『かえっこショップ』『ぬいぐるみシアター』。またペットボトルファニーチャーをつくる中で住民達が自発的に参加する流れができ、そこで発せられた声を元に、ペットボトルの工房となった検見川の民家は、寺子屋やカルタの練習、『幻灯会』等が様々に展開する『気まぐれハウス』となった。ペットボトルで彩られた『たまり場カフェ』が、その民家だ。カフェに併設された検見川FMでは、継続的な街頭インタビュ

ーで生まれたつながりを基盤とし、次々と町の方がゲストとしてマイクを握る。ファイナルイベントとしてステージを飾った南村千里のリードによる、検見川の高齢者4名が中心となつて作りあげたコミュニティダンスは、小学生の手による音響をバックにプロジェクトのクライマックスとなった。

プロジェクトの諸企画は、夏頃から検見川の各所で同時多発的に発生し、ついには山場につとなり今年プロジェクトをつくり出した。自分はプロジェクトの推進や町とのつながりを組織として養おうとするなかで幾度も壁に直面していたが、うずくまる自分を凌ぐ構想力、エネルギーで乗り越えていく学生達の動きにより、プロジェクトにいきいきと参加するかわりが検見川に根付いていたのだという事を山場の当日に学んだ。このプロジェクトでは様々な世代の町の人が学生と共に表現の表舞台に立った。オープニングでのあの情景は、レセプションパーティー、コミュニティダンスとそれに続くファイナルセレモニーで徐々にその輪を広げながら三峯神社に集う人を包み込んでいった。眼下に望む検見川の町とそこに残されたこの春からの(また、2000年からの)プロジェクトの軌跡を、夕日が検見川住民も含む我々の胸に焼きつけていった時、プロジェクトは幕を閉じた。「たまり場・陽だまり・舟だまり」のテーマを歌いきった瞬間だった。

学生代表 大島賢一

展示室で考える

展覧会が出来あがるまで 2 巡回展の成り立ち

マスコミが展覧会企画に関わるようになったのには、それなりの歴史的経緯があります。見せ物のレベルではない博覧会や展覧会が発生して間もなく、明治時代後期には既に展覧会の主者に新聞社が名を連ねています。文化の新たなスタイルに興味を持ったのが世事に敏感な新聞社であったのも当然のことでしょう。そしてそれ以来新聞社は綿々と展覧会開催に係わり続けているわけですが、それは日本に特殊な事情ともいわれています。新聞社は基本的には文化を批評する側にある報道機関なのです。しかし戦後間もない1947年にいち早く「泰西名画展」を開催したのも新聞社でしたし、戦後の美術を方針づけた「読売アンデパンダン」も「現代日本美術展」も「安井賞展」も、新聞社が主催したものです。日本の新聞社は展覧会をプロデュースすることを通じて、積極的に文化に関わり続けてきたわけです。しかし今日の巡回展隆盛の要因には、他の要素もあります。それはなによりも、この美術館も事業予算が減少し、予算と手間の掛かる企画をゼロから作り上げることが出来なくなっていることでしょう。例えば、ひとつの美術館の予算で、海外の近代美術史に名を残す、例えば印象派の画家のような芸術家の回顧展を開催することはまず不可能です。ところがそれが、何館かが予算を持ち寄って共同企画にすれば可能にもなるわけです。そのためには、イベントに手慣れた取り纏め役が必要になりますが、そんな時に社会の木鐸たる新聞社は、またとない打ってつけの機関です。それに、展覧会づくりに欠かせない海外のコレクターや美術館との交渉とは、行政のシステム内では収まりにくい即断、それも一担当者の身には余り一大判断が必要な交渉も含まれるものです。その部分を「木鐸」が請け負ってくれば、ものごとはよりスムーズに進み、正直いって美術館は「ラク」です。そんなわけもあって巡回展は流行るわけです。しかし恐ろしいのは「ラク」に鎮座していると、私たち美術館のスタッフが自らの頭脳で、意義のある企画を考え、実行にうつす気力も失われてくることです。何しろ今の時代、売り込まれてくる展覧会はよりどりみどり。業界用語でいう「パッケージもの」、つまり作品もカタログも、時にはポスターちらしのデザインまで準備された企画の中から集客が見込まれそうなものを適当に選び、数的な実績さえあげていれば、それで済ませてしまうことも出来るのですから。実際、お金を払って頼んだのだからといって、展示作業に手を貸そうともしない公立美術館の話の聞いたことがあります。重宝な一方、うっかりしていると美術館員が自らに与えられた使命を、そればかりでなくプロとして最低限必要なプライドまで忘れる罫となるのが、マスコミとの共催の、巡回展です。(ha)

「美術館ニュース」編集担当からのお願い

11月3日は千葉市美術館の開館記念日でもあります。開館後7年を数える間に、千葉市美術館のニュース「C'n」も24号を数えることになりました。その間には、若干のレイアウト変更等がありましたが、内容は一貫して当館で開催する展覧会関係の記事を中心に編集してまいりました。館のPR誌的な役割は十分果たせていると存じますが、美術館の発行するニュースとしては、多少ひろく美術界のトピックを取りあげるべきか、また他館の展覧会情報など、情報誌的な内容も盛り込んだほうが魅力的だろうか、などなど、編集担当にも逡巡があります。そこで、読者の皆様からも内容に関するご意見をご感想頂戴できれば、幸甚に存じます。

編集担当は不在の場合も多く御座いますので、ご面倒でもご意見はお葉書、ファクシミリかe-mailなど書面で頂きたいと存じます。

260-8733 千葉市美術館 美術館ニュース係
FAX: 043-221-2316
e-mail: museum@city.chiba.jp

千葉市美術館

お問合せ：043-221-2311 ホームページ：http://www.city.chiba.jp/art

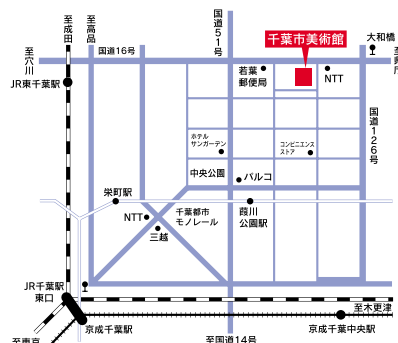
JR千葉駅東口より

徒歩約15分

バスのりば⑦より京成バス「大和橋」下車徒歩2分

千葉都市モノレール県庁前行「靉川公園」下車徒歩5分

京成電鉄千葉中央駅東口より徒歩約10分



【編集・発行】 千葉市美術館 〒260-8733 千葉県千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chiba 260-8733 Japan

【発行日】 2002年11月5日

【制作・印刷】 株式会社プリンテックメディア